1．聖書について

預言は決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが　神から受けて　語ったものです。ペテロの手紙第二　1章21節

聖書の基本的な教理を学びましょう。それによって、聖書の全体を学びます。

まず、聖書についてです。その要点は、①聖書は神の霊感によって書かれた、②聖書は神のことばである、③聖書はイエスさまを指し示す、の三点です。

まず、①聖書は神の霊感によって書かれました。「聖書はすべて神の霊感による」とある通りです（Ⅱテモテ３章16節）。聖書は聖霊が書きました。それで聖書には誤りが無いということになります。イエスさまのことばによると「一点一画も誤りが無い」のです（マタイ５章18節）。とは言え、筆をとったのは生身の人間です。文学的で格調高いものもあれば、素朴で、文法的に怪しいのもあります。でも、そういう人間臭さを殺さずに聖霊が書きました。人の能力と個性を１００％生かし、聖霊が１００％主導して書いたのです。それで、霊感された書物である聖書には誤りがないのでした。

ただし、正確には原典に於いて無誤ということになります。原典は現存せず、あるのは写本です。今日私たちの持つ聖書は写本の年代等から原典の本文を特定する学問の成果です。写本の古さと数の多さで本文の信憑性が高まりますが、数ある古典の中でも聖書は群を抜いています。70年代に書かれたヨセフス『ユダヤ戦記』は写本数は１３０で、10世紀以降に書かれたものです。でも、聖書の最古の写本は、旧約で１世紀、新約で２世紀初めと古く、写本の数に至っては新約で約二万四千、旧約は数万と桁外れです。私たちの聖書はこうした膨大な資料を研究した成果です。

聖書について知るべき二つ目は、②聖書は神のことばだということです。ペテロは言います。「預言は決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」（Ⅱペテロ１：21）「預言」は「聖書」のことです。ペテロは聖書が神のことばだと言います。人が考え出したものではありません。聖霊に「動かされた（φερόμενοι『運ばれた』）」人が語りました。１００％神が担いで語らせた、それが聖書です。

このことは、聖書が信仰と生活の唯一絶対の規範であることを意味します。聖書は単なる歴史の書物とか、数ある宗教書の一つというものではありません。神が人類に与えた唯一の啓示の書です。これ以外に神を正しく知る方法はこの世にありません。私たちが神と神のみこころを知るには、聖書があれば十分であり十全です。ですから、たとえ神秘的な「神のお告げ」を聞いても、あるいは感動的な教えを聞いても、それは神のことばではありません。あくまで聖

書こそが神のことばだからです。むしろ、聖書を勝手に解釈するなとペテロは教えます（20）。聖書に勝手に何かを付け加えたり取り除く者には、災いと永遠の滅びが下ると黙示録は警告します（22章18～19節）。そして、16世紀のフランス信条が言うように、神のことばである聖書は世のあらゆる物事を判断して改革する基準となります。

「我らは、これら６６巻の中に含まれるみことばが、神から発したもので、権威をただ神から受け、それを人から受けていないことを信じる。すべての真理の基準であって、また神への奉仕と我らの救いに必要なすべてのものを含む。故に、それに追加したり、除いたり、変更したりすることは、人にも御使いにも許されない。その結果、古さ、習わし、多数、人間の知恵、審判、判決、勅令、布告、会議、幻、奇蹟も、この聖書に反することはできない。かえって、すべてのものは、聖書によって検討され、調整され、改良されねばならない。」（フランス信条１：５）

このように、聖書こそが神のことばです。人は罪深く、いつも間違えます。事実、神秘的な幻も、立派な装束の教皇も、荘厳な教会会議も、よく間違えました。だからこそ、誤りなき神のことばである聖書によってその真偽を判断し、間違っている時には正さなければなりません。カルヴァンが言うように、「みことばなくして、人には暗黒しかない」のです。

１５２１年、ローマ教会の改革を訴えるルターは、ヴォルムスの国会で異端の嫌疑をかけられ著作の廃棄と自説の撤回を迫られた時、教皇や教会会議もしばしば誤りを犯したことを指摘

した上でこう言いました。「私は、聖書の証言と明白な理性で説得されない限り、自分の主張を撤回することはできません。」たとえこの法廷で死刑を宣告されても聖書には逆らえないというのです。聖書は神のことばだからです。そして、「ここに私は立つ。他には何もできない。神よ、助けたまえ。アーメン」と言ったと伝えられています。こうして、ルターは聖書に立って教会の改革を訴えました。そして、これによって世界を二分する教会改革運動がヨーロッパに拡がっていくことになります。

聖書は誤りなき神のことばという教理を話しましたが、一方で、この教理は18世紀以降は近代合理主義の挑戦を受けています。合理主義は人の理性に合うものだけを受け入れます。理性しか信じません。これに対し、聖書を誤りなき神のことばと信じる信仰は、理性を聖書の下に位置づけます。人の理性は堕落して神に逆らうからです。

世界を正しく理解する鍵は聖書にあります。世界は神のことばで造られたからです。聖書から世界を見なければなりません。自分のこと、家族、教会、仕事のことなど、聖書から世界を見ます。現実から聖書を見るのではなく、聖書から私たちの現実を見ます。自分の考え、他人の考え、世間の常識など、世には様々な価値観が渦巻いています。そこから自分を考えると、自分がどういう存在かは正しく理解できません。でも、聖書を開くと、人は誰でも神に愛され神のかたちに造られたこと、でも神に背いて滅びること、それなのに神が見捨ず、神の子イエスにあって神のかたちを回復してくださったという、私の本来の姿を知ることができます。そ

して、同様に、私たちの隣人と世界の真実な姿を教えてくれるのが聖書です。他には誰も教えてくれません。聖書は神の世界観、神の目です。

最後に、③誤りなき神のことばである聖書はイエスさまを指し示しているということを確認しましょう。イエスさまは「聖書はわたしについて証ししている」と言われました（ヨハネ5章39節）。旧新約聖書が証しするのはイエスさまです。「どこを切っても金太郎飴」で、創世記から黙示録までどこを読んでもイエスさまが出てきます。それで、聖書を読むことでイエスさまを知ります。聖書を読むことでイエスさまの声を聞きます。聖書を読むことでイエスさまの恵みを知ります。聖書を読むことでイエスさまのみこころを知ります。聖書を読むことがイエスさまとの交わりなのです。そして、聖書の教理に従うことがイエスさまに従うこととなります。戦時下イエスさまのためにいのちを捨てた聖徒たちは、聖書の教えを文字通り行って、殉教しました。聖書を読んで、イエスさまに従いましょう。